
春を映す割れた鏡

ボーン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春を映す割れた鏡

【コード】

N0720M

【作者名】

ポーン

【あらすじ】

遠い未来で失われたものを映す鏡。

今日はどんな服を着ればいい。

分かりやすく、買ったばかりの春色のワンピースに、袖でも通してみようか。この前会った時、白いブーツを履いていった。大人気なく階段を駆け上る私を見て、貴方は少し長めカッターシャツの袖口で、白い襟の上を覆った。軽く全身を揺らしながら。

黒いリボンがひらひらと舞う様子は、気に入ってもらえたのかな。犬の尻尾のように、感情を露骨に表現してくれるそのひらひらで、購入を決めたただなんてこと、知ってるんだろっか。

鏡の前で、何回も振り返ったり、伸びしてみたり、服の皺を伸ばしたり、入念にチェックして、家を出た。日曜の昼時の光景は、どこもかしこも目に鮮やか。柔らかい風が心地よく肌を撫でるこんな季節は特に顕著。

着いてみれば、これ以上ないほどにわかりやすい待ち合わせ場所だけど、貴方がどこにいるかわかるはずがない。春を意識したパステルカラーが白を主体にしたパレットの上のように軽く爽やかにそこかしこに。甘い薄桃色も、優しい水色も、可愛くてふわふわしている。灰色とか、くたびれた白シャツとかが少ないのは、まだ社会人は働いている時間帯だからか。明らかに流行を意識している同世代の人ごみ。まぎれてしまったら、見つけることなんて、できないでしょ。

それとも、貴方は、見つけてくれる。うん、と肯定してくれたら嬉しいけれど、多分それは嘘だよ。だから、そんなことはこの先も決して聞かない。

携帯を取り出して、かけ慣れた貴方へ。

耳へと押し付けた携帯からは呼び出し音が未だ鳴っている。視界に入る範囲の人間の中に、いないのかな。携帯に対して反応している人がいないもの。

今日、迷った末に、この前買った新しいパンプスをおろして来た。折角のデートだから、全身で表現したいじゃない、あなたを好きなんですよ、ってこと。でもそのせいで、ちよつと足が痛い。だから待たされるのはキツイななんて、きよろきよろしていたら、後ろを通る小さな半ズボンにぶつかってしまった。

「ごめんね、僕。」

「僕じゃないよ、私だよ。」

と、返る高い声。子供だからというだけでなく、どこか鈴の音をイメージさせるその声はまさしく女の子のもので。素直に、勘違いしてごめんねと謝ると、彼女はそばにいた人間の方へ手を伸ばした。彼女の頭六つ分は上のほうから彼女のほうへ伸ばされる黒いスーツの袖。整えられ、角ばった肩のフォルムが一瞬だけ崩れる。私へと向き直ったタイトなスーツは、腰の辺りで軽く皺をつくってから、子供を連れて去って行った。

そして、入れ違いに、私の肩に、そつと置かれる。大事なものを扱うように軽く、包むような感触。振り向いた拍子に、携帯からぶら下がるストラップが頬に軽くあたってしまった。

「いたつ。」

と思わず言うのに、

「間抜けだな、ホント。」

この声は。

「待たされるかと思った。」

意外に早く来たけどね、と意地悪するように言ってやると、貴方は黒いジャケットを私の頭の上に。撫でるなんて、小さい子扱いされてるみたいで納得がいかないけれど、今日だけは許してあげる。

光沢のある黒いジャケットの下に着込んだ白いシャツとネクタイが、そして細身のフォーマルな感じのブラックジーンズが、私好みだから。何気ない風で、私のために装ってくれる貴方が好きだから。

「じゃ、行こう。」

手を繋ごうとしたら、目測を誤って、空を切ってしまった。大し

た事じゃないけれど、なんとなく沈んだ私の手と気持ちを抱き上げ
てくれるのはいつも貴方。まだほんのり肌寒い春の空気の中で、間
違いなく貴方の手の温もりを感じて。ぎゅっと握って歩き出す。

今、どんな顔をしているの。

私の手を包む大きな手は、一体どんな形で、どんな爪なの。

ネクタイが綺麗にされたその首は、どんな太さで、首を傾げたら
どんな皺が寄るの。

歩いてても歩いてても、私たちの目に映るのは服と、装飾品だけ。そ
してそれは目的地に着いたって、どこに行ったらって、変わらないこ
の世界の真理。

なぜ、人間の姿は、人間の目に写らないのだろう。その身に纏う
ものしか、認識できないのだろう。ときたまそれが酷く悲しいこと
だとなんとなく思うこともある。当たり前のことであっても。

何時の間にか足が止まっていたようで、不意に彼が私の手を引い
た。

心配してくれて、ありがとう。でも貴方には、私が俯いているこ
とさえ、わからないんだよね。

見えないけれど、なんとなく彼が訝しそうな顔をしている気がし
たので、見えないだろうけど、満面の笑顔を浮かべて言ってみた。

「なんでもないよ。」

彼について、踵でリズムを刻むように歩く。

帽子でも被ってくればよかった、と思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0720m/>

春を映す割れた鏡

2011年1月19日01時46分発行